HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	「ホタテガイと出稼ぎ」
Author(s)	境, 一郎
Citation	北海道大学教育学部社会教育研究室報, 1975, 93-97
Issue Date	1976-03
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/28580
Type	bulletin (article)
File Information	1975_P93-97.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

随　　想

「ホタテガイと出稼ぎ」
（小・中学生の作文から）

研究生　境　　一　郎

1　出稼ぎと密漁の浜から

『密漁の何が悪いの』

密漁は年々多くなり、最近は私たちの部落でも、船をもって部落に残っている人々は毎日といってよい程出かけていきます。

しかし、ただ単に、漁師が悪いといえないと思うのです。

密漁というのは確かに悪い。だが、そこには、なぜ密漁をしなければいけないのか、問題があると思うのです。

それは、社会のしくみです。現在は漁業よりも「出稼ぎ」が本業となっています。・・・・・

それは、魚がとれないからです。

（昭和４０年１１月　青森県平内町浦田中学校文集・吉川源吾）

『死なないために・・・・・』

法律を信じて生活がよくなるのであったら漁師は法律を信じていたことでしょう。

漁師に守られないということは、漁師にあってないような法律を作っているからだと思います。私たちの村では、今は、魚もアワビもナマコも小さいのだけしか海にいません。

しかし、小さいのでも取らなければ生活はよくなりません。

だから、海からなんでも取らなければないということになるのです。

法律には、小さいのを取ってはならないと書いてありますが、その法律を守って取らなかったら、漁師は、うえ死してしまうかもしれません。死なないためには、法律を破って取らなければならないのです。

（昭和４５年　浦田中学・学校文集・双子島）

昭和３０年代初の神武景気（昭和３２年）、昭和３５～３６年の岩戸景気、そして、池田内閣の高度成長政策の中で、むつ湾漁民は、漁業だけで食えなくなり、夏場は東京などの土建会社に出稼ぎに行き、冬場は失業保険をもらいながら片手間に漁業をやっていた。

その漁業も、密漁があとをたたず、学校文集でその是非が教師、生徒間で論ぜられた。

第１表をみてわかるように、昭和４１年の県調査によると、総人口に対する出稼ぎ人員の割合が３０％をこえているのは、平館村の６１.６％を筆頭に、平内町３６.３％、川内町３０％、三村３０.３％と、農漁村から都会への人口流出が相次いだ。

＜表１＞　出かせぎ世帯調査

（昭和４１年９月現在）

区　分		総世帯数に対する出かせぎ世帯数の比率	総人口に対する出かせぎ人員の比率
青森県		13.9	16.6
東郡		31.4	34.4
主町な村	平内町	32.2	36.3
	平館村	57.3	61.6
	三村	28.7	30.3
下北郡		31.9	37.1
主町な村	川内町	25.9	30.0
	佐井村	26.4	29.7

（青森県 昭和41年９月調査）

＜表２＞　生産量比較

（道漁連資料）

年次	青森	北海道
３６	1,780	9,033
３７	737	9,107
３８	437	8,457
３９	214	6,487
４０	282	4,857
４１	744	8,283
４２	1,781	6,313
４３	1,124	4,768
４４	6,136	10,232
＊４５	14,370	12,722
＊４６	12,900	12,873
＊４７	31,400	15,270
＊４８	35,000	24,388
＊４９	46,932	33,607

＊印は、青森が北海道ホタテを追い越した年度

２　ホタテガイ養殖成功とふえる漁業人口　－３年間に1.8倍－

従来、ホタテガイの主要生産地といえば北海道であった。昭和９年には９１,５４４トンを水揚げをし、文字通り北海道はホタテ王国を誇っていたが、第２表をみて理解できるように昭和４１年以前は、問題にされなかった青森ホタテが次第に生産を伸ばし始め、ついに昭和４５年北海道の生産を追い越したのである。

青森ホタテが北海道ホタテを追いこすカギとなったのは、青森市奥内に住む工藤豊作さん一家の開発した「タマネギ袋」によるホタテ種苗生産の大成功である。

以前は、むつ湾全体で１００万個もとれなかった稚貝は、原子力船むつ事件のあつた４９年には1,０００億粒の大豊作となった。

ホタテ養殖が成功すると、今まで出稼ぎに行っていた人達も続々と帰ってきた。

平内町は、このホタテ養殖の成功によって３年間に、漁業人口が1.８倍も増加し、出稼ぎは完全にストップした。

平内町役場調べによると、３０日以上の漁業経営体の動向は、昭和４２年に５８７であったものが、昭和４５年には1,０６０と実に３年間に４７３経営体がふえた。

３　原子力船むつ事件とホタテガイ

ホタテガイをして、日本だけでなく、世界中にその名を知らしめたものは、なんといっても原子力船むつ事件である。

昭和５０年９月５日の閣議で、原子力委員会が提出した原子力白書（４９～５０年合併白書）が了承された。

この白書が語っているように、『昨年秋の原子力船〝むつ〟の放射線洩れ事故が原子力の安全性への懸念を一層かきたて、ひいては原子力行政全般に対する不信感を招くことになった。』と

事態の深刻さを率直に認めている。

明治以来の出稼ぎ生活から解放され、ホタテ養殖によって、やっと人間らしい生活を営んでいける見通しをもった漁民は、原子力船〝むつ〟による放射能汚染を何よりもおそれた。

昭和49年6月5日、森山科学技術庁長官がむつ市を訪れ「150億円もかけた船をいつまでもこのまま放置するわけにはいかない。これ程の設備をもっているのに、安全性に疑問をもつのは、科学に対する挑戦だ」と、むつ出港を強く示唆した。

日本原子力船開発事業団理事（旧南極越冬隊長）西堀栄三郎氏は、「原子力を恐れるものは火をを恐れる野獣のようなものだ」とまで漁民を説得した。

このようにまで原子炉の安全性を徹底宣伝して、8月25日、「ホタテを守れ」「おら達の海を守れ」と小船で阻止する中を、折からの台風14号のうねりと強風で包囲をとく中を、原子力船むつは、強行突破したのである。

ところが、9月2日、青森県尻屋岬東方800キロの沖合いで、原子炉の臨界テストが終了し、約2％という僅かの出力をあげたとき、設計値の1,000倍を上回る放射線漏れ事故を起したのである。

漁民の怒りは頂点に達した。

9月5日、青森県漁業史始まって以来の4,500名が青森市合浦公園に集まり母港撤去を求めて総決起集会が開かれた。

市民団体も、労組も母港撤去を求めて態度を表明し、青森県知事や自民党県連さえも、帰港反対を表明せざるを得ない状況に追いこまれた。

ホタテガイでやっと生活できるようになった漁民は、日本分析研のインチキ分析データ問題、放射能管理のずさんさ、原子力発電所の度重なる事故や故障といった一連の事件にひきつづく今回の〝むつ〟事件だけに、硬化したのも当然といえよう。

政府は、さっそく鈴木善幸自民党総務会長を全権大使として現地に派遣、ついに〝むつ〟の帰港と引きかえに、2年以内の母港撤去、半年以内の移動をとりきめた。

この世界史上、未曾有の海難事件は、全国民的関心事となったばかりか、ガーディアン紙（49.2.25）は、ロバート・ホワイトマン記者の「港のない船」という記事をのせ、『船名が「おむつ」と似ているのは、皮肉というほかはない』と戯言を弄しつつ、日本政府の原子力平和利用計画が〝むつ〟と共に漂流してしまったことを指摘した。

4　90億円を越えたホタテガイ大量へい死

—また出稼ぎに逆もどりか—

「ホタテ」　青森県平内町東田沢小学校5年　山本妙子

「ホダテ死んで　やらいねぐなったら、なんの仕事やらじょ」（ホタテが死んで、やられなくなったら、なんの仕事をやるんですか）

ごはんをたべている父と母に私は聞いた。

「ホダテ死んでやらいねぐなったら、東京の方さはたらきに行くべな」

父が怒っているように言った。

わたしの家は、ホタテが死んでいる。
東田沢では、夏休み前からホタテが死んでいる。
海の温度が高くて死んだと言っている。
文集「ひらない」9号・平内町教育委員会（50.12.10発行）

「死んだホタテ」　青森県平内町浦田小学校6年　後藤峰子
「ホダテ死んでまれば、なんど、どせ。」
（ホタテが死んでしまえば、おまえたちは、どうするか？）
学校から帰ると、こんな言葉が近所の人からよく聞こえるようになった。
「沖さ行ったら、26度もあった」と幸博くんのお父さんが言う。
ごはんをたべている時も、いつもと様子がちがう。笑いが少なくなったようだ。
私達の部落は、ホタテで豊かになってきた。
新しい家も、新しい船も、1軒に1台の車も、みんなホタテのおかげだと思う。
毎日、学校へ行けるのも、父や母がホタテの仕事をしているからだと思う。
そのホタテがとれなくなったら、部落の人たちは、前のような生活に戻ってしまう。
それは、出かせぎである。
また、父や母や、兄たちは、東京の方に行って、別れ別れになって暮らさなければならない。
家に残るのは、おじいさんや、おばあさんや、私達だけになってしまう。
村は死んだようになってしまう。
考えただけでも、ぞっとする。
こんなことにならないように、ずっとホタテのとれる部落でいてほしいと思う。
（同　文集「ひらない」9号）

むつ湾で発生している養殖ホタテの大量へい死をしらべるため、昭和50年8月と、昭和51年1月の2回にわけ、各地をまわつて調べ、その与えた影響の重大さを、身をもつて感じてきた。

水産庁調査団は、山本護太郎東海大教授を団長に、8月18、19日調査をし、大量へい死の原因につき「不良な稚貝まで育て、過密養殖したところへ、異常海況が重なったもの」と、人為説を強調した結論を出した。（東奥日報50.10.16）

青森県は、密殖説を否定、昨年12月末14億円の天災融資法の適用をうけた。

さて、子供達の目は、大人たちの密殖についても、するどい批判がつづく。

「死んだホタテ」　浦田小学校6年　後藤峰子
「ホタテが死ぬ原因は1つは、海水の温度が高くなってきていること。
もう1つは、海の中にホタテのカゴを入れすぎたからだということだ。
このことは、新聞をみてわかったことだ。
私が考えるには、カゴを余り入れると、ホタテのたべるプランクトンがなくなるからだと思う。
また、海にカゴを入れすぎると、海水の流れが悪くなるからだと思う。

二つの原因で、海水の温度は人の力ではどうにもならないことである。でもカゴをたくさん入れたため、ホタテが死んでいるということは、ホタテの仕事をしている人たちが考えなければな

らないことである。

自分の家だけお金がもうかればよいという大人の考えが、ホタテを殺しているのかも知れない」

（同「ひらない」第9号）

大人の欲のくらんだ目より、子供達の方が客観的に物事を適格に判断しているといえる。

カキの産地広島も密殖で漁場が荒廃し、真珠の伊勢湾、気仙沼のカキも、密殖と、フンの影響で成長がにぶり、病害が発生し、廃業が相次いでいる。

密殖は、決して増養殖の宿命でない。

「ホタテがだめなら東京に出稼ぎに行く」そんなことを言えない昨今の経済情勢である。

失業者は完全失業者で１００万人をこえ、不完全失業者を入れると３００万人をかぞえる。

むつ湾漁民は、子供達のこの作文を是非全員がよんでほしい。

昔の苦しかった出稼ぎの歴史から、ホタテ養殖で、やっと人間らしく、夫婦がひとつ屋根の下に住むことが出来るようになった。

その漁業者としての誇りが、原子力船むつを阻害する力となり、漁民は、始めて団結の尊さを公害で苦しめられている全国の漁民に明らかに示し、確信を与えたのである。

このような協同の力、団結の力を示した漁民は、必ずや、広島、宮城のカキ、伊勢湾の真珠貝の密殖のニガイ経験を深く学び、二度と同じテツを踏まないことを信じている。